
Unknown

朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Unknown

【Nコード】

N6165A

【作者名】

朔

【あらすじ】

新型ウィルス《アンノーン》。感染者は保護、発症者は絶対排除。適合者は警察庁駆逐課にてアンノーン駆除に徹底すべし――最悪に最低の世界で生きる。

#000::H o l l y h o c k (前書き)

グロテスクなシーンを含みます。次話も読んで下さるようであれば、以後もご注意下さいませ。

#000::Hollyhock

ノイズが耳に障る。

例えば、何ものにも臆すことなく生きていくことができるというのなら——誰もが何と思うことなく生きていくのか、と思う。

何も捨てず失わず、幸福をシアワセだなんて知りもせずただ生きていくのだろうか、とか。ありとあらゆる恐怖に怯え、その中で些細な幸せを知って初めて、一生は幸福であったと言えるのではなからうか——一般論ではあるけれど。

限界を学びだした頭の片隅、いつの日からか余裕すらも有り得なくなってしまうた今、そんなことを思い出す。

必死に作り上げた時間を削って、今更どうでも良いことを考えては後悔した。

考えれば思うほど、理解した分だけ——無意味だったから。

『ガッ……ザー……おい、さん？ 聞こえ……すか……』

耳穴に食い込ませるかのよう当てた片方だけのイヤホンは、ノイズ混じりに声を出す。最近の電波障害から発せられる雑音に、煩いな、と眉をしかめて煙草を落とした。

ここ数日続く天候不良——湿気の多い雨のおかげで湿気た煙草を踏みにじり、滅入る気分すらも踏みつけた錯覚に陥った。踵でぐりと踏んで茶色の細かな葉を撒き散らす。

弱すぎる霧雨によって濡れた髪を掻き上げ、己の武器を引き抜いた。

絡む血と肉を落としながら抜ける白刃のそれに、血まみれな自身映し出されて軽い吐き気を覚えてしまう。踏みつけたはずの滅入っていた気分を思い出し、斬り刻んだ人間だったモノを思いきり蹴り上げてその肉片を散らしてやった。

少年の死体——そう称して良いのかどうかなど最早不明だが、それは蹴られた衝撃で自らの口から吐き出した肉塊を食い千切ざるを得なかった。

しかし、幾ら見慣れたとはいえ、やはり気味が悪い。

否——気味が悪いのは、これらと同一物でありながら人に紛れる自分自身か。

『あ……いさーん？ 聞こ……ガー、たら、へん……ザッ』

見るもおどましいもののへと化した四人の少年等。

ある者は昆虫の羽を自らの肉と骨で形成し、またある者は植物の葉のような腕をアスファルト上で伸ばしている。

それでも彼等は人間であったことを示すかのように、内も外も変えられようが原型は辛うじて留めていた。

「聞いーこー……てたーらー！ ガッ……返事下さーい！」

「煩いよー涅々」

あは、と笑いかけて眉間の皺を解く。猫を被る、そういうわけではないが、笑顔で己の本性を隠すのは最早癖と言って差し支えない。無線の向こうで大声を出した彼女に、緩く笑いかけた。

「だいたい電波障害は直ってきたみたいだね。ど？ そっちの感染者は」

『内側からの発症だったらしくて発症者、になってましたよ。全員《駆逐》完了しましたし、後は燈斗さんが無線の電源を入れて連絡を取り合って』

「集合して本庁に帰って、報告書を書いてまた待機——か」

『……私まだ、こっちに來てから生活用品すら揃えてないんですけど』

「諦めんさい。都市部の《駆逐課》に休みは無いに等しいから」

都市部に配属されるということはかなりの出世なのだが、やはりそれに比例してこなさなければならぬ仕事は大幅に増える。最先端の文化を得、世界の経済を大国と営むのはいつの時代も国の中心だ。

中心には人が集まる。

百年以上前、人口数がピークから急激に減った今だからこそ尚、厄介なものが蔓延るわけだが、そんなことは所詮戯れ言。

新しく入ったノイズが右の鼓膜を震わせた。

『つーなーがーっちゃー？』

涇々の声には程遠い低い声が聞こえる。燈斗の声だ、と班員の安全を確認し、携帯電話を開いた。メモリを指定し電話を掛けて耳に当てる。

『お疲れ様です、燈斗さん！』

『おう、元気っちゃーなー涇々イ。そっちもお疲れさん』

既に廃れてしまったはずの東北の訛りと、型に嵌った標準語の会話がイヤホンの向こうで開始された。明るい性格の人間同士が織り成す日常会話に口元を緩めて電子音を聞く。

『はい、中央区警察ち』

機械が発する声を聞き、言い終わる前に記憶に残る数字の羅列を述べようとした、その瞬間――

「……あ」

二つ折り携帯電話の画面部分のみが、堅いアスファルトに叩きつけられた。

「あー……なんていうかな」

最悪だ。

心の内でそう呟くが否や、長刀を持つ手に力を込めて地を蹴った。尋常でない高さの跳躍に、敵となった人間だったモノは驚きもせず異様に伸びた腕を繰り出す。

見れば、その腕を持つ異常者は年端もいかない幼い少女であり、まだ生きているその首の付け根からはまた、別の肉塊が刺のように二、三本姿を現した。ぶちい、と皮膚を突き破って細長い肉を伸ばすその様は、まるで植物のようでもある。

となると――足元に視線を移せば、やはり少女は赤い靴を破ってコンクリートに根を張っていた。まだ、それこそ初期の段階ではあ

るけれど。

「あぎゃ……あ、が……っう」

声に決してなりはしないうめき声。極限まで開かれた口の端はちぎられている。

変化した舌は膨張して伸びきり、吐き出るように下へと流れ出た。

「ぎゃーん、マジキ、モ、イ、しー」

『キモイのお前だべさー……何、まだいたん？ 場所分かるばって行くか？』

「ん、一人だけみてーだからいらねーわ。とりあえず《処理課》の方に連絡よろしこー。俺んケータイぶっ壊れちゃったからね」

大方、少女は今まで怯え隠れていたのだろう。感染しながらも発症しなかったのは、ある程度の抵抗を見せていたのだろうか。

向かい建物の屋根に足を付けると同時、また跳ねる。つい先程まで足の置いていた場所は少女の硬化した長い腕によって大破していた。

建物は二階建てアパートなのだが幸いにも留守中であるらしく、悲鳴も何も聞こえない。民間人の避難などまるで頭のない状態でそんなことを思う。

少女の手は壊れた壁を掴んで、指を根に変え寄生し始めた。まずい、と刀で手首を斬り落とせば指の変形は止まり、腕は重力に従って落ちていく。腫れて太い腕に右足を乗せ、そのまま——走り出した。

綱より何倍も太い人外のものの腕を伝って辿り着く先は——感染し発症した少女の本体。何を狙う——そういうわけでもなく、ただ走る。

腕からまた新たに生える肉の刺は青年に追いつくことなどできずに伸びるだけ。先回りをしていても彼の刀に斬られて終わる。

壮絶な痛みにも少女は声を上げることすらままならず——たった数秒の間に、刃は少女の首と生えてはならない肉塊の間を捉えていた。

ずぶ、と刀の切っ先が皮を千切る。

「ごめん、な」

百二十センチ超の長い太刀は垂直に小さな少女の体を貫いた。真っ直ぐに、最後は内股から刃が僅かに顔を覗かせる。

崩れて倒れる足場から降り、本来の地面であるコンクリート詰め
のフィールドに足をつけた。

魚のように痙攣するその体から刀を取り出すために、足で少女の
体を押して刀を手前に引く。斜めに突き刺さるかのようになった血
塗れの刀を――一気に引き抜いたところで、化け物と化した少女の
体は根を張る足を立てたまま崩れ落ちた。

見開く目は充血し、細胞の急激な形状変化と膨張、増加による
激痛に叫びきれなかった口はもう、裂けきっている。

見ているだけで吐き気のする少女の血と肉にまみれるその光景、
作り出したのは恐らく背後で重なる少年等。

四体もの発症者を相手にしていたのだ、周囲にまで目がいかない
のは己の失態と同時仕方のないことではある。《こう》なるまでの
感染経路を見逃したとしても何ら不思議でない。

発症者による攻撃――その瞬間、発症者の皮膚から未感染者の傷
口に、それらは入り込んで細胞の改革を行う。感染から発症までの
時間は、常人で短い者から十秒程度、多少長らえることができてた
ったの三分。

今のところ、未発症者に関しては定期的にワクチンを投入するこ
とで完全な発症を免れることはできるものの、発症者に有効な治療
方法はない。

発症イコール、死だ。

「あー……最、低」

今はただひたすらに感染者を排すのみ。

しかしそれも限られる。生身の人間が向かえばやはり、それに感

染して発症してしまうのだ。過去それによって一体、何百、何千という人間が犠牲となったか——計り知ることは最早不可能に近い。

このウイルスの発生源、ルートは共に不明。未確認のそれを単純に、いつからか《アンノーン》などと呼ばれ出した。

それら死のウイルスごと悉く駆逐するために現在の警察庁が組織したのは《駆逐課》。

一般の捜査課、安全課は表の治安を守り、《駆逐課》に続く《処理課》など特別課に属す部署は裏側からの治安を守る。

《駆逐課》第四班所属——葵・アマハラ。

性別、男。年齢は二十歳、未婚者。外見的特徴として襟足の長い赤茶けたミディアムヘア、優男の称号がピタリと当てはまるかのような垂れ目は日本人特有の漆黒。

彼は——否、彼等は《アンノーン》感染者にして《アンノーン》適合者でもある。零に近い確率の中で生まれた異端者は、現在のところ二十名弱程確認済みだ。

その中に埋もれたのが、葵。

「汚れたー、コート汚れたー。洗濯マジダリィ……てんで燈斗ちゃん、よろ」

『自分でやれ』

けれど。

限界はある。

#000::Holyhock (後書き)

初めましての方もそうでない方もこんにちは、或いはこんばんは。
世界観の説明を最後に纏めてお送り致しました……すみません、首
の付け根から変なものを出してすみません。

ですが、書いてて死ぬほど楽しかったです (危険)

全体の七割を地の文にした方が良いと言いますが……九割くらい地
の文になりました。読みにくいです。私が。

ここまでお付き合い下さりありがとうございます！

#001..Beach

バイクのエンジンを切ってキーを抜いた。

黒のショートヘア、下部分が癖のおかげで外に跳ねている。本人はそれを公にコンプレックスとしてはいるものの、言われたところで何を気にするわけでもない。どちらかというと隻眼に関してウサギだのなんだのと貶されると頭にくるらしい。

ならコンプレックスは目だろう——それは髪で誤魔化している。と、本人は言っている。実際のところ、目を馬鹿にされると叫ぶので意味はない。

それが全国を駆ける配達屋——汀・ミナヅキである。

「うおっはよーございまー」

屋根だったのであろうトタンを蹴り倒し、汀は扉をぶち壊した。どうせ戸締まりなどとは無縁のアパートなのだ、扉一つで何が起これるというわけでもない。雨風さえ凌ぐことができれば住まいというもののは成り立つのだ。

べこ、とか踏みつけた扉が音を立てたが、ここは敢えて見ないでおこう。

たくさんのコードと古臭いパソコンを蹴り飛ばし、時には踏み、汀は奥へと進む。後で靴跡のことは言われるのだろうか、と考えながら、肩に提げた鞆をかけ直した。

崩れたのか、最奥の部屋へ繋がる扉は七、八台のパソコンによって塞がれている。ガタガタ言っているのは部屋の主が中から押しているのだろうか。

どうやら重くて開けることができないらしく無言ではあるものの、相当焦っているらしい。

証拠に扉の向こう側の人物は非常に忙しく扉を叩いたり、押したり、終いには蹴っているではないか。ある意味物凄い恐怖に値す

る。

「うわーん！ 誰かーっヘルスー……あ、違ったヘルブー！」

「ヘルブ。スペルは《HELVE》。道具、武器などの柄——正しくはヘルブだバーカバーカ」

敢えてプの部分強調し、汀は扉を蹴る。

その衝撃を直に受けたらしく、向こう側の人間は

「ふぎやう！」

と一つ、叫びとも呻きともわからない声を上げた。

汀の台詞と行動でその存在に気付いたのか、余計に部屋の主は戸を叩いて自己主張し出す。いちいち大きい声を出すな、高いから。と、言う暇も与えず、彼女は——情報屋、望実・ヌクイは荒げた声で騒ぎ出した。

「そこにいるのは汀だね、汀・ミナヅキ、みーちゃんだね！？」

「みーちゃんヤメレ」

「あああああ！ お願いっ多分にそこでドアの前を塞いでるパソコン共を退かしてここを開けて頂戴！ 全くなんて恩知らずな機械達なの？ 後でぶっ壊して——じゃなくって！ 開ーけーてーええ！」

生理現象にでも耐えきれなくなったのだろうか——などと、非常に失礼なことを考えながらパソコンの本体、ディスプレイ、キーボード等を面倒なので足を使い退けていく。

その辺に転がしておけば後々文句を言いながらも望実が片付けるのだ。退けてやっても良いが片付けてやる義理は持ち合わせてなどいない。

やたら重い四角い機械の山を扉が開く程度にまで脇に押し込める。途中、本体の硬い角部分がディスプレイにめり込んだのを見た気がしたが——

「錯覚だ。目の錯覚……最近寝ずに配達頑張ってるもんだから、ちよっと気分が悪くって幻覚見ただけだって。……あれ？ それもヤベェなオイ。あ、開くぜのぞ」

「トイレエエ！」

「おぶ!？」

勢い良く開いた分厚い扉と、汀の振り向いた顔が凄まじい包容をする。

ドアノブが腹に食い込まずに済んだのがせめてもの救い、不幸中の幸いか。しかしどちらにしろ、顔面に直接攻撃を受けたのだ――鼻が痛い。潰れたくらいに痛い。鼻血は出ていないようで安心したが、痛い。

犯人を怒鳴りつけてやろうと思いが回った時には既に、彼女は一瞬でトイレへと駆け込んでしまっていた。

水が流れる音が聞こえ、トイレットペーパーを回す音が響き。再度水の流れる音がしている、その間にも汀の怒りはどんどん膨張していく。閉じ込められているのを助けてやったというにこの仕打ちは一体なんだ。日頃の行いは良いはずだ。

……割と。

「あっはーすっきりしたア、生き長らえたー。いやあ全く、女を捨てるところだったよ」

ケラケラ笑いながら出てきた金髪少女にもう一段、怒りの感情を上乗せた。

「あんがとねみーちゃん。……と、鼻なんて押さえてどうしたの。

鼻血? 花粉症? 鼻炎? 蓄膿症?」

「……言うことあんだろ? つーかみーちゃんやメロ」

「え? ああ……あー! 汀、あんたディスプレイに輝入れたね!」

「謝れやボケエエ!」

少々腐って脆くなっている扉を蹴り飛ばす。と、板仕様の扉は汀の足をいとも簡単に貫き通していた。

一瞬の空白。

現状を理解することに、汀と望実の二人は予想以上の時間を有し――叫ぶ。望実が。

「なあにやってんのオオオ!? お前もう破壊神で良いですからア
!　　それで鼻潰しちゃってごめんなさい!」

「まだ潰れてねェよ!　てーか謝るのはオマケか?　ついでなのか
?　それから破壊神っておま……軽くへこむんですけど」

「で、何の用?　破壊神」

最早ツッコむ気力も失せたのか、汀は余計な溜め息の後、鞆を前に引き寄せてチャックを開ける。やたら量の多い封筒を掻き分けて、一枚、やたら青白く目立つノートサイズの封筒を取り出す。

妙な膨らみから、中には段ボールで保護された何かが入っていることだろう。彼女の職業柄、それはきつとコンピューター関係のものでCD-Rやフロッピーディスクなどと言ったところか。

汀としては何ら興味もない、工作上差出人と宛先人のプライバシーを守らなければならないという二つの事から、中身など知る由もないのだ。

知って、死んだ連中もいたりする。

現在の日本に反発する――俗にレジスタンスと呼ばれるもので、過激派に分けられる組織間を往復するなど、配達屋にとっては日常茶飯事だ。その点で言えば汀自身も犯罪者に成り得るのだが、そう易々と捕まるなどと思ったら大間違いである。

備えは万全、それなりの装備――というか武装は怠らない。

銃刀法なんざくそくらえ。……世も末だ。

「ホレ、お前宛て。珂南から」

危ないかな、殴られるかもなと思いつつ、分厚い封筒を望実に向かって軽く放る。

反射神経に廃れた彼女でも余裕で掴み取れるくらいのそれは、確実にトイレの前に立つ彼女の腕の中へと収まった。

珂南・カタヤマと書かれるそれには、汀が宛先人である望実と差出人の珂南、両人と知り合いであることから住所は書かれていない。

無闇に簡素なそれをズタズタに引き裂いてゴミも床に散らしたま

ま、望実中は身を確かめた。段ボールとナイロンで作られたクッションの中、押し込められていたのは、やはりというかなんというかな――CD-ROM。

最近の彼女等は《情報屋》と《レジスタンス》の情報交換というよりは、友人同士でのゲームソフト貸し借りといった状態になっている。

微笑ましいと言えば微笑ましいのだが、いかんせんエンジニア同士での共同作成で出来上がるものだから内容が怪しい。

後ろから覗き込んでみれば容赦なく撃たれる、と言ったところか。それからは見ようとも思わなくなったのだが。怖いし。

「おおうば!？」 さっすが珂南ちー、最高!」

「キアラ崩壊してんぞさっきから。さて、俺アまだ仕事あつから消えるわ――と。お前は何か配達モンとかあるか?」

「んや。仕事用意してあげれんでゴメンね。代わりにただで……交通情報でも教えてあげるよ」

「あー……頼むわ。ケータイ、最近じゃナビもまるで駄目になってからな」

機嫌が非常に良いらしい彼女、長い金髪を纏めて左に流し、閉じ込められていた部屋へと引っ込んでいく。

淡く青い光にのみ満たされたその部屋の真ん中――埃を被るパソコン達にあらゆる箇所を埋め尽くされた箱の中で、望実が設置された椅子に腰掛けた。

ディスプレイの上に積み上げられたCD-ROMを達磨落としの如く一枚だけ引っっこ抜くも、案の定積み木は音を立てて床に散らばった。

「あーあーあー、お前ホントA型だよな」

補足。A型の人間の特性として、片付けは上手いが一度散らかると極限まで散らかすらしい。

「ぬ。片付けなんてやってる暇がないの」

「引きこもりのくせに……」

「中央から北側の路地、八十パーセントは交通止めくってるね。《アンノーン》が出たみたいで警察庁の連中か後始末してるっぽいね」話を逸らしたな、と横目で見てやれば僅かに顔を逸らされたのは気のせいかな。否、気のせいでない。

「最近多いな、発症率が一番高エのってやっぱ都市部だろ？ 東京、新宿、渋谷、原宿——人がやたら多く集まる場所だ」

「結局はそういうもんなんだよ、病気なんてのはさ。人から人に感染するものは人を介して広がるからこそ過密地域を満たしていくの。媒介がないとウイルスや菌なんてその辺に浮いてる空気ではないもん。……ま、とりあえず汀も気を付けて。《アンノーン》にも警察にも」

「用心するに越したことねーか……中央通りから北側を避けて通リや、今んとこ問題は殆どねーんだろ？ 情報無料提供、感謝すんぜイ」

一歩踏み出していた足を引っ込め、汀は部屋を出ていこうと歩き出す。

その際に望実から見送ろうか、と声を掛けられたが丁重に断っておいた。そっちも仕事くらいあるだろうと適当に理由を付けて。

「じゃーあなー、次会う時まで生きてろよ」

「ウサギちゃんもねー」
わざと、だろうか。帰り際、いちいちこの女は地雷を踏んでくれる。

「誰がウサギじゃボケ！」

腹いせに壁に穴を空けてから次へと向かうことにした。

依頼人の意向で差出人の名前は不明な、一般的な細長い封筒。表面には宛先側の人物名と住所が綺麗な字で描かれている。

住所を確認し、舌打ちをした。

見てみればここからそう遠くはないが、場所が問題である。簡単に推測して——宛先はここ大通りの北側。《アンノーン》の処理が現在進行形で行われている地域だ。

次に回しても良いのだがそうもいかない。

多分大丈夫だろう、などと妙な自信に背を押されながら、汀はバイクに跨った。裏を通れば検問に引っ掛かる確率も断然低くなる。

「たく、食ってくのも楽じゃねーな」

宛先は《葵・アマハラ》。

どこかで聞いたことのあるその名に嫌な予感を覚えながら、汀はボロアパートを後にした。

後ろに望実の怒声を聞きながら。

#002..Light

洗面台を流れていくのは、真っ赤な血。

自分が死ぬ――なんて、そう本心から思う人間は無いに等しいはず。いずれは死ぬのだ、と頭では常にそれを肯定していても、どこかで必ず自分は大丈夫と逃げている。

決して悪いことではない。

保守的になることで人間の精神は世間一般に言うところの正常を保っていられるのだ。

葬もまたそうやって、己の命と精神を守っている。でない――壊れてしまうだろうから。

「葬イー、まーだー？」

急かすその声に若干の苛立ちを覚えるがしかし、こちらの方が年上なのだと自身に言い聞かせる。とは言っても、声の主とはたった一つしか違わないのだが。

「早く戻んねば便所長エって思われんだろ？ マジに早く出すもん出しちゃえよ」

「ゲホッ……何よその言い種アよー。親友が血反吐吐いてったときになんて辛辣な言葉！ 俺泣き……うおえっ」

「あーもー分かったはんで出るもん出して楽になれ。便所塞いでんのも楽じゃねー……あ、今バカが使用中なんで掃除後にしといて」
遠退く足音を聞いて、本当にもうこいつは余計なことをと思う。
なんか誤解されたような気がするの自分だけか。

何かを言おうにも吐き気によって口が塞がれてしまい、声を出すに出せない。出るのは血ばかりだ。

「報告書もまだ半端だはんでや。……ああ、くそダリー」

扉一枚隔てた向こう、心底嫌がるように聞こえたのは最後だけだ

った。

既に捻つてある蛇口からは勢い良く水が溢れ、洗面台にこびりついていた血を洗い流してはその都度排水口へ吸い込まれていく。

もう驚きもしなくなつた光景に、あまり吐きたいとは思わない溜め息を吐いた。

その際にまた、口の端から血が漏れてしまい、更に葵の機嫌を損ねていく。だからといって他に牙を向けたくないから笑顔でカバーするのが。

下がる口端を無理矢理上げた。

「燈斗ちゃん、悪いんだけどタオル持ってきてくんね？　血だらけで顔も上げられんからさ」

「言うと思つた。親友に感謝せや。ついでにワイシャツとネクタイなんかもあつたりする」

「お前、絶対良い嫁になるよ……うん、男だけだね。嫁さん。俺父親設定でお前娘？」

「安心しとけ、今はどこさも嫁ぐ気は……て、健全に生きろ！」

屈んでいる姿勢であつたがため、燈斗の投げてきた真っ白なタオルは背に乗った。

口を二、三度ゆすいで洗い、ついでに顔にも水をかけて視界の端で揺れるタオルを掴む。

四つに折つてまず口元を拭い、そして裏を返して顔を拭く。

顔中に張り付くような水滴が全て柔らかいタオルに染み込んだ時にはもう、鏡に映る己の顔は普段の色を取り戻しつつあつた。

当然、タオルは真っ赤。

「何言つてんの。冗談に決まってるでしょーが」

確か血液はぬるま湯に浸けると取れるのだったか。跡が残るようであれば漂白剤でも使えば大丈夫であろう。

最近一人暮らしをするようになって、ずいぶん家庭的になったものだと思う。

タオルを洗面台の端にかけ、燈斗から洗剤の匂いにまみれるワイ

シャツとネクタイを受け取った。

糊のおかげでしわ一つないワイシャツに袖を通して大した柄もないネクタイを締める。かなり緩くして。

スーツの上着に関してはずすがに替えが効かない。ので、裾の長いコートとシャツごと腕にかけてまとめ上げる。

壁に寄りかかって佇む大刀を手にしたところで、完璧とは言わずともそれなりに身なりは整えられた。

「出るもん出したー……お待た？」

扉を開いて顔を覗かせれば、包帯に巻かれる見慣れた手が葵の鼻面を軽くではあるがひっぱたく。

思わず大袈裟に仰け反ってしまい、二次被害として背後で閉まりかけた扉に後頭部をぶつけてしまった。

「何すんだっミイラ！」

デコピンも喰らった。

「だから何……あ、ミイラって言ってゴメンナサイ。すみマセンっした」

何やら物凄い殺気を感じたがために謝っておいた。

一応手を出してきたのは向こうなのだが、怒ると怖いのだ——否、その右腕に額、そして右側に限り腕と足に包帯を施すその姿について馬鹿にされた時、か。

下手をすれば踵落としが落ちてくる。

最初出会った時に、心に決めた。

「たく……検査行けっちゃーべ？ なして行かねーんだよ」

燈斗・タカツキに《ミイラ》はタブー。「あ、何？ 心配してくれちゃってんの燈斗君。やー、お兄さん嬉しっ」

「腰くねらせてんじゃねえよキモい。つーかはぐらかすなって言っちゃんだねな、いつもいつもよオ？ それで？ 一度病院……」

「意味ねーよ」

トイレに繋がる扉を閉めて先を歩けば燈斗もついてくる。

廊下を歩いて振り向くのは、一般にある捜査課、安全課の連中だ。

彼等は怯えるように葵と燈斗を避けていく。

当然と言えば当然——自身があの未知のウイルス《アンノーン》に感染し、発症するのを恐れているのだ。誰もあのような醜い化け物になどなりたくないのは至極当然。

腹が立つと言えば立つけれど。

怒る気力だって削がれてしまっている。「どうせもう死ぬって。

死が近いと分かりゃ退職、早エ老後はベッド中でモルモット。死ぬなら悔いが残んねーように生きるまで……悪いな、俺のデータ残してやれんくて——もう少し優しいやつだったら、喜んで実験材料にもなってやれたんだけど」

「端っから期待してねっつの。好きなように長生きしやー良いんでね？ つーか死んだら仕事のしわ寄せ来っから、死んだら殺す」

「え？ それ酷くね？」

何やらとても無情な言葉を言われたような気がしなくてもない。

しかし今更氣にしたところで何かがどうなるとか、変わるわけでもないから、葵はそれ以上の追及をやめて扉を開ける。

と、爽やかな青色が目飛び込むと同時に、鼻を中心に鈍い痛みが顔中に広がった。

一体なんだと見てみれば——床に落ちたのは空のファイル。

「もう、遅いんですよ二人共！ 班全員報告書書いたら帰って良いんです、早く帰って買い物行かなきゃ！」

涇々・レンジョウ。

葵や燈斗と同じ駆逐課四班の彼女は今、スーツスカートの下に黒ジャージを履いて膝まで捲っている。

高校生ではあるまいし——と口にすれば、今度はボールペンの一本でも刺さりそうなのでやめておく。

「あ、悪い悪い。ところで……みんな出払っちゃってんの？ 忙しいにやぐぼ！」

「邪魔。入んなら入りやー良いべよ。突っ立ってんな」

背中を蹴られて仰け反った。

「全くよ、うちの子達はなんでこうも暴力的なんだか……ん？ 早く帰って良い、ってどういうことよ、淫々」

「なんかさっき、ヒノモトさんが来まして。報告書が出来上がり次第提出、帰宅。けど葵さんと燈斗さんは呼ばれてました」

葵と燈斗で顔を見合わせ、二人同時に何やったんだお前、との台詞を吐いた。

「……あ！」

ノートパソコンの電源を入れる。

それと時を同じくして、ようやくと思い出したかのように葵が声を上げた。

「やっぱオメーか！」

「いやいやいや、まさか聖の野郎がなア……実はな、この間、燈斗の名前を聖のデスクに彫つといた」

補足。聖とは聖・ヒノモト——警察庁総務課。

駆逐課や処理課などの指揮を担当する課に所属し、事実上で言えば葵等の上司だ。

「面白いことしてますね！ 今度一緒にやりましょう葵さん！」

「良い子は真似するんじゃないやありません！」

「堅いこと言うない、燈斗ちゃん」

「テメーが一番の元凶じゃねーの！？」 ちゅーか小学校気分かあああ！？」

四班の三人がいるだけで広い部屋は一気に煩くなる。

一番騒がしく破壊的、命令違反もなんのその——だから聖に呼ばれたわけでもないだろう。

今日は被害自体最小限であるし、一番壊したのは淫々だ。彼女、キレたらしく、中学校だかを半壊滅状態にしたらしい。

「しかしな、それ以外に思いつかねーわ。ああ、そーいや聖から借りた一万、返してねエ……あったかな。ないな」

「明日給料日ですし、抜かれるんじゃないですか？」

それは最悪だが致し方あるまい。

とにかく――葵には燈斗と共に呼ばれる覚えは全くと言って良い程になかった。個人ならばともかく。

「ところで葵さん、燈斗さんもトイレ長かったですよね。大丈夫ですか？」

「ああ、ちよつと燈斗が腫れててな」

「オメー、マジ死ねよ」

必死で弁解に回る燈斗からシャープペンシルが飛んだ。

「あ、腫れたら良い泌尿器科、紹介しますよ。葵さん」

「多分お前が一番セクハラだよ？」

楽しかった。

家族というものの懂れていたからこそ、これ以上ないくらいに、燈斗と涇々が好きだった。

けれど、もうすぐ終わる。

命が尽きると同時、内臓が《アンノーン》に侵されけると同じに。葵の人生は――終わる。

「それじゃ、私はお先に失礼しますね。出しといて下さい」

はた、と瞬く間に現実に戻され、ジャージを履いたまま出て行く涇々に笑顔で手を振った。

「あんま買すぎんなよー、給料日前だから」

「葵さんじゃないですから心配は不要ですよー」

「最もだな」

燈斗の容赦ない言葉に苦笑いをしている間に扉は閉まり、駆逐課全班――総勢十二名という人数を入れるだだっ広い部屋には、葵と燈斗のみになってしまった。

部屋にはパソコンを起動させる、機械の音しか響かない。

静寂が耳を麻痺させ、それを知ってか知らずか、燈斗は何も喋ろうとはしないでいる。

葵よりも先に起動させていたのか、彼は声を発する代わりにキーボードを忙しく打ち鳴らし始めた。

「燈斗ちゃん。俺、ちょいその辺のコンビニまで煙草買いに行つて良いですか」

「逃げる気だべ」

「逃げない逃げない。逃げたところで逃げれない」

「俺、小腹空いた」

「了解」

適当にパンか何かを買ってこい。要はそういうことらしい。

画面から目を離すことなくキーボードを打つ燈斗をそのまま、葵は今だ起動しきらないパソコンを放って、コンビニまで出向くことにした。

煙草こそ、箱にまだ二、三本残ってはいるものの、世に言うヘビースモーカーの葵には足りないくらいである。

増築もせず改築もせず——ただ廃れていくやたら高い建物から出、コンビニにまで至る道を歩き出した。

少々遠い場所ではあるが車を使えば余裕、扉を開けて乗り込み、葵はキーを差し込んだ——ところに。

「あ、俺んちの方向じゃんか」

煩い煩い街の中。

廃れてきた——などと言ったところで信じて貰えないであろう都心、北側の地区で。

いつもと違うものを立ち並ぶ建物の隙間から、たった一瞬だけ視界に捉える。

それは自らに巣くう《アンノーン》ウィルスのおかげかどうかはともかく——とにかく、見えた。

赤い、血の飛沫。

車は走り出す。



バイクは北側へ、成人前の少年を乗せて走る。

ヘルメットのことで見回り中の警官等に注意を受けたが、汀はそれをたった今撒いて細い路地裏をマイペースに走っている。

もう追ってきていないことを再度確認して、一度バイクを路地の端にとめた。

住所確認のためである。

バイクに跨ったまま、エンジンは入れたまま——手紙を見て住所を覚え、地図を広げて場所と示し合わせる。

「……かなり奥か……住んでんのかよ」

全く怪しい場所に住んでいる人間だ、と思い、男か女か思索する。

《葵》であれば女の比率が多いが、男に使われていても何ら不思議でない、中性的な名だ。

願わくば——美人な女性であって欲しいものだが、あくまでそれは汀の願望にしか過ぎない。

バイクを再び走らせ、目的地へと向かうためにスピードを上げた。

こう奥まで来ると見掛ける人の数は少なくなってくる。たまに見ても孤児やら何やらで、中級階級の家庭が主だった日本の面影はどこにもない。

眉を顰めるがしかし、目を合わせては後が厄介だ。

こんなスラム街に宛先人が住んでいる——どうやらかなり酔狂な人物であることに間違いはないらしい。

それ以上考えるのは止めた。

関係ない。

「関係ない、関係ない。あ、ダルい」

最後の台詞が前半とどう関係したかはわからないが、そこで汀の思考回路は運転にのみ集中する。

――はすが。

「き、あああああがぎゃ、うぐエ！」

――奇声。

何事か、とバイクをとめて見れば、先に上を見上げていた初老の男は叫び声を上げて逃げて行った。

嫌な予感に流れる冷や汗を無視し、上を、ゆっくりと、見上げてみた――そこには。

「――《アンノーン》」

ぐちゃり、と音を立てて肋骨を生やし、そして腸を垂れ流す細い小さな少年と。

巻き込まれたのか、彼の母親と。

発症してから一体どれくらい経ったのか、植物のようにアパート一帯に根を張った彼は今、ようやくと姿を現した。

呻く母親をその腸で締め潰し、血しぶきを上げて、既に自我を失った彼は他も取り込んでしまおうと茎と根に変わり果てた下半身に命を下す。

その口元は、笑った気がした。

新しい玩具を与えられた、子供のように。

「マジか、よ」

にたり――と。

#003::Nautical

街中。波をかき分けて走る、葵の車。

慣れ、イコール、麻痺。

その等式を理解したのは昔々、薄れる記憶の奥底で、しかも片隅だ。

針のムシロのようにじわじわと痛めつけては血で流していくこの居場所、もう慣れたものだと言ったのは理解したその瞬間。

痛みに傷みを重ねて決ってしまえば——何も感じなくて済む、と。思っている。

人が邪魔だ。

車だからこそ、人の波に抗いすることができず、進むことが困難でしかたがない。

乗り捨てるか——否か。

これ以上進んでも車では進み辛い路地を通らなくてはならない——ので、波が途切れた瞬間を見計らって、葵は車を留める。

愛刀その二を持ち、鍵を掛けて出てみれば、視界に飛び込んだのは至って普通の光景だった。

けれどその先に——何かはある。

何かは、確かに人間の気配を追ってこちらに向かい、侵食を果たしている。

「……俺のアパート……多分もう駄目だよな……や、何もなかったけどさ」

置いてあったものと言えば、せいぜい布団くらいのもの。あのよ
うな安物に未練はないのだが、意味もなく払ってきた家賃が憎々しい。

走り出し、葵は跳躍をする。

それは常人では有り得ない高さの跳躍で、いとも容易く高めに作られた一軒家の屋根に飛び乗った。

高さが変われば見える範囲も違ってくる——その光景を見て、思わず笑みが浮かんでしまった。

一体どうすればこれほどになるまで放っておけるのか。おそらくは非合法でのワクチン摂取であろうが——詳しくは調べてみなければ分かるまい。

今は殺す。

それだけ。

あの化け物と化した子供を殺さなければならない。

最早頭しか残っていない彼は失った唇により声も吐けず、家の住人ごと取り込んだであろう家を手足としていた。 侵食はまだ進んでアスファルトに根を生やしているではないか。

「およ」

その先——まだ細い根の先は、黒い装甲のバイクを捕らえて真っ二つにせんと巻き付いていた。

予想にはできないような怪力にて締め上げれば、バイクはシートから割れて燃料を撒き散らす。

ガソリンは——追い詰められた少年の、漆黒色で染め上げた髪を濡らした。

「生存者、一名。とりあえず確認だな」

まだ彼は感染していない。助けるなら今だけだ。

根がバイクに満足するまで、一分。

少年を襲うにまで、十秒。

もし彼が感染したとして発症までは、短くてこれまた十秒とない。そして。

葵が彼の目の前に立つまでには、たったの——

「ヨ、ユー」

どちらが上か。
見せてやる。



「遅ェんだいな！ あいつマジにどこ行っちゃんずや、ええコラア！」

あれから何分経ったのか——なんて、葵が出た時刻など覚えていない。

コンビニに行くなどそう時間が掛かるわけでもないのに、葵はまだ帰らない。

最初こそレジが混んでいるのだろう、と思っていたのだが、遅筆の燈斗が報告書を終えるまで来ないのだ。

「逃げたな、逃げやがったなあ野郎！ 俺、食いモン楽しみにしてたっちゃーんに、アイツ死ねば良いのに！ あ、やっぱ今の嘘！生きて苦しめば良いのにな！」 怒りでデスクを叩くその様は幼い子供に等しい。が、燈斗は十分に大人の扱いを受けて良い年である。

と、目の前に設置された電話が甲高い悲鳴を上げて燈斗を呼びつけたので、不機嫌さを露わにし、受話器を取った。

「はい、《駆逐課》ですけどっ」

『《駆逐課》 燈斗・タカツキと確認。エリアN五十、E二十三地区にて《アンノーン》発生。早急に四班は向かえ』

「——了解」

受話器を置いて溜め息を吐き、周囲を見渡した。

おそらく涇々には携帯電話に《情報課》から連絡は行ったであろう

うが、問題は葵。

つい先程の任務にて壊れてしまった彼の携帯電話、彼は今連絡が完全につかない状態である。

「行っちゃーべか」

彼が帰ってこないところを見ると、いち早く現場に着いているかも知れなかった。

というか、その確率が高い。

葵のデスクの脇で佇む長すぎる長刀――鞘を握って持てば、変わらず有り得ない重量を誇っていた。

嫌な、予感がした。



長年、無理矢理乗ってきた黒いバイク――は、真ん中から二つにひしゃげてしまい、燃料をダラダラと流している。

先程目の前で勢い良く散っていた薄汚れるガソリンは、汀の髪を濡らし、異様な臭いを放つ。たった少量であろうとも臭いはきつい。

「――は、クソ、どうしろってんだよ」

背には壁、横も壁。前には――《アンノーン》に犯された少年の体だったもの。

汀のバイクに絡み付く少年の根は、その矛先を変えようと細いながらも本数を増やしつつある。

全く、化け物だった。

しかし、ここで空いた通路など頭上に広がる空くらいのもの。

だが周りは全て高さを揃えられた建物のみ、逃げることのできる

ような道はどこにもなかった。

「日頃の行い、悪かったからな……人殺し以外はやった気分だわ」
ふとこちらを向いた根の先端が、大口を開けるがごとく二つに割れていく。

気持ち悪いながらも目が離せない——植物にしては柔軟な動き、それはまるで太ったミミズのようでもあった。

そしてそれが済むと同時、たくさんの根はバイクを巻き上げたまま一斉に先端を汀へと向ける。

「キモー！」

まるで目があるかのような俊敏な動き。彼等は汀の方を向いたまま微動だにせず、ただ黙って汀を見ている。

——と、思いきや、ぐちぐちと粘着質な音を立てて根の先端は割れていき、ようやくと根は動き出す。

避けることなどできはしない。

口を開けて襲い掛かる根を断ち切る術も、汀は持っているわけがなかった。

「——っ！」

開いていなければならぬ目を強く閉じ、硬直して動かない体に激痛が走るのをただ待つ。

「少し足掻けよな、少年」

だが、それはいつまで経っても来ない。

代わりに聞き覚えのない声が聞こえ、キン、と金属が動く音が耳に届いた。

「死ぬ様は目、かっぴらいて見とくもんだろ？」

最期の瞬間だしな——と、汀の網膜に焼き付いたのは、燃えるような赤。振り向く彼の目は闇色で、まるで自らの色を交換したかの

ような感じだった。

一瞬にして脳裏をよぎる語は、葵・アマハラ。

警察庁《駆逐課》エース的存在、第四班所属の彼は、汀とそう変わらない年のものである。

やっと——頭の中で引つ掛かる名の答えは弾き出されたのだ。

噂に名高い大刀にて根をなぎ払い、葵は鞆に白刃のそれを収める。次が来る——と視界の端に肉を捉えれば、汀の体は宙に浮き、そのまま地面を離れていくではないか。

「うおわっ」

「はいはい、暴れんなよー」

汀を肩に担いだ状態で跳躍した葵の体は、三階建ての四角い家の屋根にまで到達した。

人間には有り得ない高さの跳躍——やはりあの噂はどうやら核心を射ているらしい。

彼等は《アンノーン》適合者、だと。

感染し発症してただ死にいく者でもなく、発症をワクチンにて抑制する、仮初めの生を生きる者でもなく。

何が原因で発症しないのかはわからないが、そういった適合者が警察庁の特別課には存在すると、裏でも表でもまことしやかに広まっていた。

その中でも特に有名なのが、葵・アマハラ。

先程の通り、彼は《駆逐課》のエース的存在であると聞く。これこそ一部にしか伝わっていない情報である、と望実が言っていた。ずいぶん——若い。

もっと筋肉質な男を想像していたのだが、予想以上の優男。

この外見であの《アンノーン》と対等以上にやり合えるというのだから、そこはやはり《アンノーン》ウイルスに感染しているからなのだろうか。

「少年、俺さ、アイツ殺さならんから一人で逃げてくんね？　ぶっちゃけそっちが本業でさー、人助けは苦手なんよ」

ふざけた野郎だ。

「ふうん。別に、逃げれるし」

「あいや、反抗期真っ盛りの中学生みたいなツラしてんぜエ？
とにかく頑張って逃げ」

「あ、その前に」

ちょうど良い。本人が目の前にいるのだ、預かった手紙を渡してしまおう。

鞆は常に肩に掛けておいて本当に良かったと思う。

チャックを開けて中身を漁り、やっとあの青い封筒を見つけたところで再び――葵が汀を担いで跳んだ。

「何しやがんですかおああ!？」

今まで足をつけていたコンクリートを突き破り、根が姿を現す。

汀と葵を追うようにしてそれらはこちらへ勢い良く伸びてきた。

矢のような速さの先端が迫る。

「追い付かれる……!」

「っばいね」

「悠長なやつだな!」

絶対にどうにかできるという、腹の立つ余裕。

実際その自信は確かなもので、足を狙う根に葵は飛び乗り、そこからまた今度は下へと跳ねる。

「今の世はあれだって、スローライフ。ちゅーわけで俺になんか届け物？ 配達屋君」

言葉の使い方を間違えているような気がしないでもないが、敢えて何も言わないでおいた。

空中で空気抵抗を受ける中、風に煽られる掴んだ封筒に意識を向ける。

「あんた、葵・アマハラで良いんだよな？」

「あ、俺ってば有名？ それとも写真かなんか出回ってたりすんか」

「有名だよ、あんたはね。まあとりあえず、差出人不明のお手紙をお届けに上がりましたぜー」

訝しげに眉を顰める葵は成功した着地の後、汀を肩から降ろして封筒を取ってロングコートの懷にしまい、背を押した。

弱い力ながらもいきなり押されたことで、汀の体は少々よろけてしまう。

「着払いじゃねーよな」

「分捕りてエな」

「安月給のお兄さんをいたわりなさいよ」

「公務員がナマ言うなよ」

——無駄に似てる。

体躯とか、性格とか。

だがしかし今はどうでも良いこと。

「縁があつたらまた会うかね」

「ごめんだっつ」

それもそうだ、と笑う彼の背を見届けることもなく、汀は葵と擦れ違つてそのまま駆けた。

ここから逃げなくては。

逃げなくては——ならない。

葵は跳ねる。

汀は駆ける。

「ひうつ、あ——！」

耳に届いたのは少女の声。

「危な」

拓けた場所に出てみれば、そこで見たのは小さな少女が根に喰われようとする寸前の光景。

「い」

腰を抜かして座り込む少女を抱えるも、肉でできた根は口を開けて目の前に迫っていた。

咄嗟に少女を投げれば、かすり傷を負いながらも恐怖に脅える目で汀を見——笑えば、彼女は立ち上がって走り出す。
意味のない助けを求めて。

「最悪だ」

本当に、意味のない。

#004..Hope

向かう目的は、あの赤黒く変色した少年の頭。

いつからか怖いものなど何もない錯覚に陥って、全てを守れるような気がしていた。

けれど錯覚は夢。夢は叶わない。

世界なんてそんなもの。

人はいつの時代も、弱過ぎた。

「遠いよな。ホント遠いよなアーもー……今頃燈斗と湮々、急ぎでこっち向かってるかな」

だからといって彼等を待つ時間はない。

その一分一秒でさえ、きっと《アンノーン》に支配された体は侵食をとめることはないはずだ。

太い肉の根に覆われていく北地区——とどこで人の各部位が埋まっており、飲み込まれた彼等は根に更に栄養を与えている。

気味が悪い。

ここまで爆発的に成長する例は、今まで見たこともなかった。おそらく過去の資料にも載っていないことだろう。

「街一つ、呑み込むつもりか」

放っておけば街一つでは済まない、日本全土のみならず星一つを壊滅させることだって有り得るのだ。

それを大事に至る前に完全駆逐する。

発症源から確実に殺し、《アンノーン》細胞の分裂を本体の生命活動からとめなければならぬ。

そして、これ以上の感染は危険。

上の命令次第では、爆撃等も有り得るのだ。そうなると後々の処理に困るのは目を閉じていても目に見えている。

「た、助、け……はぎ！」

まだ自我を保っていた初老の男は、葵に届かない手を伸ばしたところで全てを肉の中に閉じ込められた。

中で生きたまま消化でもさせられているのか、それとも無理矢理の形状変化を余儀なくさせられているのだろうか——どちらにしろ、くぐもった声は地獄を見ているようである。

ああなるのは御免である——ので、とっと己の仕事を済ませて、今日は署の方に泊めて貰うことにしよう。

非番は一班だが気にしない。

ひたすらに駆けていけば、本拠地であろう家が見えてくる。

入り口などもうどこにもない箱を壊すには、見える頭を飛ばす他方法はないようだ。

核が脳であるならば問題ないが、心臓等下に埋まった部位であったり、核自身が移動してしまえば困難である。

舌打ちを一つ、葵は足元に勢い良く生えた肉の刺を斬り払い、走った。

斬った際にズボンの裾と靴にこびり付いた血が肌にも浸透して巻き付く。

気持ち悪さに立ち止まりたくなかったがそうも言っていられない——止まれば取り込まれる。

「ダルい」

同一にはならないと《彼》が判断した場合、絞め殺されるのは火を見るより明らか。

「ダルいダルい、ダルいダルいダルい！　なんで俺が、こんな、人殺さなきゃなんねエよ！」

人殺しは——嫌いだ。

彼等は感染し、発症後の治療法がないとは言え、生存権を奪われたが人間である。

それを——家畜以下、害虫同等に殺さなければならぬなど——

ふざけ過ぎだ。

何度、己は悪くないと自らに言い聞かせ、その度に壊れかけたか知る者は同じ課の連中だけ。

そしてそれから目を逸らせないのは――葵だけ。

いつでも、殺した感覚を思い出す。

「おう、ガキ」

止まる。

厚めの靴底を突き破り、刺が葵の足を貫いた。

痛みに顔を歪めることはなく、葵の目は少年の頭の隣で顔だけを残す女性を捉えた。

――母親か。

自身の子供が施設送りになってしまいい離れ離れになってしまいうことを恐れ、非合法に売買される対用ワクチンアンノーンを少年に使っていたのだろう。

が、しかしそれは所詮紛い物。

どんなに値が張えど、効果は合法的なものには程遠い。

「親子愛は美しいってか？　――ここまできりゃ、醜いだけだ」

上を向いた少年の眉間に鞘から抜いた白刃のそれを垂直に叩きつけるべく、葵は太刀を下ろす――が。

背後に気配。

風を切る音が響き、振り向く暇も与えず電柱並みに太い刺は葵に襲い掛かる。

目的にまで辿り着いた。その油断が仇となったよう。

「チッ……趣味悪リイんだよ！」

体を倒して避ければ今度はもう一本、屋根から生えたそれが向かってくる。

足はもちろんのこと動くはずがなく、避けきれない刺を斬り裂いた。

元が人間ということもあって、吹き出る液は真っ赤な――血。

決して感触の良くないそれを顔面に浴び、足を引き抜いた。倒れる体を支え、走る激痛に足は耐える。

――が。

「っうあああああ！」

赤い目。

先程見た、というかもう焼き付いて離れないくらいの見慣れたその、葵自身を映す目を葵は視界に入れた。

名前は聞いていない。

逃げなかったのか、との一瞬の思考の隙を突かれた葵。その左足は、ばくり、と肉で広がる地面が喰いちぎった。

左足の膝から下――は、既にどこにもなく、傷口からはおびただしい量の鮮血が溢れ出る。

支える足の片方が失われたことにより、体は当たり前のように左肩から崩れ落ちた。

それを待っていたかのように、細い刺が何本も葵の体を串刺しにしていく。

首が刺が貫通したとき、口からは逆流した血がこぼれた。

「……あ」

だからと言って。

まだ、死んだわけでは――ない。

「いてエ」

右に持つ刀を数ミリしか空いていない地面と体の間に入れ、刀を引いた。

刺はいとも容易く切れ、葵の体は完璧とはいわずとも自由を取り戻す。

次が来る前に――と、応急処置など何もせず残った足で人の体にて作り上げた地を蹴った。

先程の赤い瞳を無意識に探す。

根に埋もれる彼の瞳を捉えたのは、足を持っていられる前のこと。

何があつて——なんて、逃げ切れなかったただけであらうし、どの道最早感染していることはわかりきっているのだ。

発症しているはずであらうことも。

だが——あの、深紅の瞳。

力を失わず、まだ己の自我を保っていたように見えた。

三分がタイムリミット。

それを越せば、一縷の望みとて消え失せる。

手首に巻くデジタル時計を見、赤い瞳の彼が《アンノーン》に感染し一分経過した状態を予測する。

「——け……」

限界まで研ぎ澄ました耳が声を捉える。

予想以上にかかる体重の重さにぐらつく体の反対側、刀を突き立て、葵は声のした方向に目をやった。

雲を掴むかのようにさ迷う手。手首を纏うのは、シルバーのブレスレット。

肘から上こそ埋まっているが、彼は足掻くように柔らかい地面へ爪を突き立ててこれ以上の吸収を許さない。

すると反対側の腕も姿を現して、彼はとうとう頭を出した。

「……ぶっはア！ 野郎、俺を殺す気かよ！？ いや、殺すためにんなふざけたことしやがったんだよな！ ……あ！ 葵・アマハラ！」

二軒、家を挟んだ向こう——垂直に建てられた壁から斜めに生えるがごとく、汀は見つけた葵の名を呼ぶ。

「よし、生きてつか、少年」

「死ぬ寸前！」

「じゃ、平気だな。まだ生きてる」

だが、その二軒のうち汀に近い方が本体であり、そうやすやすと近付くことはできない。

かと言って核を先に退治している間にも、汀は発症する恐れがあった。

それに片足を失ったこともある。

黙っておけば、細胞の急激な分裂やら何やらで生えてくることもあるが、それは一カ月以上後の話だ。

今、移動器官の足がない。

だが、速く助けに行かなければならない。

「少年！、名前は？」

「は？ んなもん聞ってる暇があったらって言いてェけどね、言わなきゃ助けてくれなさそだし！？」

おそらく自分も逆の立場だったらやりかねない。

「汀だ、汀・ミナヅキ」

「俺、葵・アマハラね。よろ」

「知っとんわい」

クスクス、いやに余裕の笑みを浮かべて、葵はまた片足だけの跳躍を開始する。

途中やはり目で追われ、その度に伸びる根やらに叩き落とされそうになったが——なんとか、刀を汀の横に刺してそれに乗ることができた。

「よう、お姫さま」

「お前、足——」

「なに、一カ月もすりゃ生え」

こんな九十度の地面で簡単に身動きが取れるはずもなく。

「危ない！」

「しまっ——」

片足だけの彼は、不幸中の幸いなのか葉のように広がる肉塊に地上へと叩きつけられた。

汀こそギリギリで避けて無傷ではあるものの、コンクリート剥き出しの地面に落とされた葵はただ事ではない。

汀はピクリとも動かない葵に嫌な予感を感じながら、必死に残りの下半身を壁から抜け出ようと抗いた。

「おい、葵！ お前……う、わ！」

まるで自ら異物を吐き出すように、壁は汀の体を押し出す。消化液のように粘ついた悪臭を放つそれは、全くもって気持ち悪い。

「いっつー……あ、葵、生きてっか……」

二階だったから肩の打撲だけで済んだようだった。葵のようになんな分厚い凶器で叩き落とされれば、普通の人間である汀など即死だろう。

しかし葵は肩で、非常に荒くではあるが呼吸を絶やさない。

「ぜーあ、がほっ!」

「うおお!」

内臓でもやられたのか、葵が喉にまでせり上がっていた血を一気に吐いた。それでも意識は戻っておらず、ひたすらに血を吐いている。

おびただしい量の吐血——汀にはどうすることもできない。

ただ、葵を起こそうと必死になるだけだ。

「起きろ、起きろバカ葵! 死にてえかアア!」

頬を叩いても、彼は真っ青な顔色のまま口端から血を流してぐったりとしている。

背負って逃げるか——と考えついた時には、時、既に遅し。

「囲まれた」

両脇には壁、頭上には赤く分厚い葉、前後には——あの、人肉で作られた根。

年貢の収め時。この言葉はこういう時に使われるのだろうか、と少し的外れな答えを思い付く。

腕には唯一の頼りである、葵。

しかし、彼は今、意識がない状態だ。

汀にはどうすることもできない。

と、根の付け根に何かが生えてくるのを汀は見た。

失った口は閉じられ、唇は一本の線と化した少年の顔は——にたり、と笑う。

「——っ」

心底愉快であるがごとく。

そして少年の頭は壁へと引っ込んでいった。

それがどうやら合図であったようで、汀の目の前で揺らいでいた根が動き出す。

——と、その時。

右半身に、違和感を感じた。

ピリピリと軽く電気を通したような痛みが走る。それこそ右側の指先から顔面、つま先に至るまで。

「あ」

そして。

皮膚と肉を剥ぐような激痛が襲った。

「あああああうああああ！」

変化し出したのは、右の皮膚。

ぼこぼこと泡立ちながら、汀の皮膚は確かに形を変えていった。槍のように皮膚は尖り、挙げ句伸び、今まさに突き刺さらんとする根を串刺しにしていく。

それは抱いていた葵の体すらも突き刺し、喜んでいいものかどうか、葵は痛みで目を覚ました。

目覚めた葵の視界に飛び込んできたのは、汀の変わり果てた姿。とは言え右だけではあるのだが、些か異常とも言える。

「みぎ、わ」

「うあいあああっ！ 皮膚、皮膚が剥がれる！ 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいいい！」

「発症した……！？」

「痛い痛い痛い！ 嫌だ、やめろ、いだいいいいい！」

意識も左半身も正常のまま——右だけの皮膚のみが発症し、ぼこりと泡立っては刺を作る。

腕に刺さる汀の皮膚から離れ、葵は目を丸くして汀の変わりゆく姿を唾然と見届けた。

発症すれば手の施しようがない——が、体の一部のみが発症し、残りを《アンノーン》に適合させる人間など知らないのだ。

どう対処すれば良いのかわからない。

殺すべきか——否か。

迷う間にも汀の右半身の皮は細胞の分裂に膨張、形状変化を否応無しに続ける。

皮膚についていけない筋肉は細胞と共に悲鳴を上げ、それが脳に伝わる度に汀の体は激痛を訴えた。

そして喉がおかしくなるまで叫ぶ——このままではショック死等もありえるかもしれない。

いつもなら放っておくものを、葵は粘った。

自らに確実に迫る死を——汀に見た。

「汀、汀！ 俺が分かるか！？」

右肩だった場所に手を置けば、手の甲を刺が貫いていく。

それは物凄い速さを持ってまるで同類を喰らい尽くすかのように、この騒ぎの張本人——本体へと向かい出していくではないか。

何本もの尖った皮膚は建物を侵食し、貫いて、防御に回る彼等を引きちぎる。

「わ、わ、あ、わが、る」

葵の左手を刺していた刺は付け根を太くし、それのおかげで葵の手は親指を残して散らばった。

ふと——壁から生まれた人の顔が物凄い形相にて、首を作って伸ばし、最後の力と言わんばかりに襲い掛かる。

同時に荒ぶる根が舞い、新幹線以上のスピードを持ってその先端で汀と葵を殺そうと迫ってきた。

「あ、おい、逃げ」

「知らね」

絶え間ない細胞の変化に叫ぶ力も失せた汀は、息も絶え絶えながら逃げろと言う。

それでも見捨てることなどできず、葵は転がる刀を手にしようと体を伸ばした。

「……っ、の、間に合んねェだろうが！」

迫る。

首と刺が最後の力を振り絞り、二人を的にして突っ込んでくる。

その迫るものの背後にあるものは、死だ。死が、先にはある。

命を脅かす存在に対し、牙を向けるのはいかなる生物にも存在するというもの。

汀は、彼等を《生命を脅かす敵》であると――確かに認識した。

葵の残った手がようやくと刀の柄を握り締め、彼等を――敵を切り落とさんと動いた。

そしてそれと同じくして、汀の変化した皮膚もまた、動く。

刀は首と根の一部を落とし、皮膚の槍は根の全てを串刺しにする。

「生きてるか、みーちゃん」

「死、ぬ寸前、だ……みーちゃん、ゆな」

核である頭が落ち。

植物を象った《アンノーン》は媒体を無くした今、活動を完全に停止した。

ただ柔らかいだけで気持ち悪い地面の上、一旦落ち着いた汀の皮膚を刺の付け根から斬った。

血がぼたぼたと落ちるが、既に激痛にて気を失っている彼に痛みを感じる余裕はない。

「いやア、人助けはするもんだねェ」

片足も欠けたこの状態で動けるわけもなく、寝かせた汀の隣で一息吐くことにした。

煙草をくわえ、ライターで火を点ける。白い煙が真っ青な空に舞い上がった。

だがそれは空に届いてしまう前に拡散して消えていく。

その儚さ——まるで人の命のようだ。

望みに触れる前に散っていく。なんて、葵自身にこれと言った望みはないのだが。

とにかく、儚い。

儚い命を手にとって、この手で生かすというのもまた、一興か。

「俺さ、ぶっちゃけた話、あと一カ月くらい生きたら死ぬんだ」

誰に言うでもなく、葵は続ける。

「見た目元気だけどさ……かなり、無理してんだわ。本当なら動けない、それを薬で無理矢理動かしてる。死ぬんならベッドの上じゃなく——なんでも良い、意味のある死に方してエ」

まだ、続ける。

「でな、汀。どうせ終わる命だ。それに俺、これ以上生きたくねえんだよ」

殺して殺して——殺して、また、殺して。

罪の重さに耐えきれ程に葵は強くない。

「俺の体、使え。皮膚の移植くらいなら、二十一世紀辺りにもう確立されてる技術で確実だし、まあ、難があるとしたら顔が変わったりとかか？ あんのかな。——ま、とにかくさ」

「お前は俺のために、生きろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6165a/>

Unknown

2010年10月17日02時31分発行